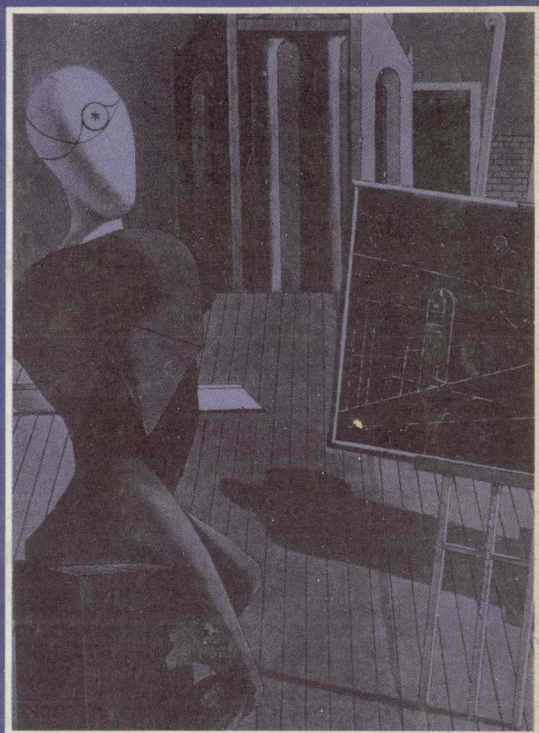
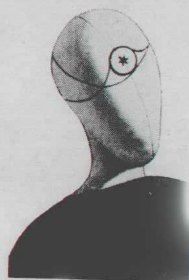


# 岳真也 未完の青春



角川書店

# 未完の青春



岳真也

角川書店

岳 真 也 (がく しんや)

本名、井上裕。1947年、東京に生まれる。26  
歳。慶応大学経済学部を経て、同大学院社会  
学研究科修士課程了。

## 未完の青春

---

1974. 9. 30 初版発行

著作者 岳 真 也

発行者 角 川 源 義

発行所 株式会社 角 川 書 店

東京・千代田・富士見2-13

☎ 102 ☎ 東京 195208

TEL. (265) 7111 (大代表)



印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社 大 口 製 本 所

---

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872132-0946(0)

## 目次

未完の青春

三

昨日のない渚

一三

反戦詩・悪夢より悪魔へ

二八

附記

二六

裝  
幀  
  
門  
田  
  
ヒ  
口  
  
嗣

# 未完の青春



## I

四方を焦げ跡やら落書きやらで薄汚れた壁にかこまれた、窓のない手狭な部屋のなかには、もうとうとたちこめた煙草のけむりでむせかえるようだった。A校舎の地下に、ドヤ街のような格好で並んでいる各サークルの部室。その一室に寄り集まったメンバーの誰もが、ひっきりなしに煙草を吸いつづけている。ムツとした人いきれとどんより濁った空気、それにどことなくすさみ弛みきったような雰囲気とが混じりあい、リーダーの松本民治をなかにして四角いテーブルのまわりに腰をおろしている一同の頭上に、渦巻いていた。

「……だから、ぼくらがだね、今まっさきにやらなければならぬことはだなア」

松本民治が今後の活動方針について、アジ演説口調にすっかり毒された、尻上りのうわずった声音で喋っている。視線だけは彼のほうに向けながら、くまか部下信吾は胸の前で腕をくみかわし、さっきからずっと他のことを考えていた。彼は今朝方ぐうぜん耳にした、父親の不可解な切れぎれの寝ごとのことを頭に思いうかべていたのである。

——明けがた、朝一番の小鳥のさえずりにふとめざまされた彼は、ベッドから這りおり、自室を出ると、小用を足しに階下の便所に行こうとしていた。そして階段を降りて、つきあたりに便



所のある廊下に足を踏みだしかけたとき、奇妙な眩き声が耳にとびこんできたのである。

「逃げるぞ……撃つな……素っ裸で……おい、よせッ……看護婦が……」彼がはつきり聞きとったのは、それだけだった。はじめ彼は何事が起こったのかと驚かされたが、すぐに父親の寝ごとだろりと察しがついた。が、それにしても、普通ではない。信吾はちょっとためらった後、廊下に面した両親の寝室の障子戸を静かに開けてみた。

案の定、父は満面に大粒の汗を滴らせ、うなされている様子だった。掛け布団をはねのけ、うつ伏せになってシーツを両手に掴み、ちょうどその上を泳いでいるような格好でもがき苦しんでいた。隣に寝ている母はまったくそれに気づかず、軽い寝息をたてて眠りこんでいる。信吾は父の肩に手をかけて、

「お父さんッ」「お父さんッ……」と、揺り起こした。

父は眼を醒ますと、毛むくじやらの腕で額にふきでた汗を拭いながら、

「悪い夢をみた」と、ひとりごちるように言った。

「ずい分うなされてたみたいだけど……親父さん、いったいどんな夢をみていたのさ」彼はわざと平静な明るい口調をよそおって訊ねた。

「ん」と応えて、父はしばらく放心したように宙を見つめた後、

「……戦争のころのことさ」ポツンと言った。

「戦争……戦争のころのことって？」彼はさらに訊ねかけた。だが、父はそれ以上何も語ろうとはしなかった。ただ黙って、あいかわらずぼんやりとした視線を天井のほうに向けているだけだった。信吾には、そんな父の素振りが、何かにじっと耐えている、といったふうに感じられた。その《何か》が彼にも判るような気がするし、それがさし示すある、凄惨な光景をも何となくおしはかることもできるのだが、それでいて、かんじんなことを掴みとれない。実感が無いのだ。父の苦悶を実感として分かちもつことができないのである。そう思うと、いま自分の眼の前に呆然として蹲っている父親の姿が、自分とはまったく関係のない赤の他人であるかのような気がしてきてしまう。それどころか、自分が生きている処とは違った、別の世界の住人がまぎれこんでいるかのような気さえするのだ。そのくせ、彼は、つい今しがた耳にした父の寝ごとにつきかり囚われてしまっている自分を感じていた。すでにそれは、彼の頭の深みにおもったるくよどみはじめていたのである。……

「逃げるぞ……撃つな……素っ裸で……おい、よせッ……看護婦が……」

上唇のまくれあがった、ぶあつく大きな口から発せられる松本民治のだみ声を聞きながしながら、日下部信吾はテーブルの上に頬づえをついて、その父の脈絡のない言葉を胸中に反芻していた。

へいったい、あの寝ごとは何だろう……何を意味しているのだろうか？いつか子供のころに、同

じような眩きが父の口から洩れるのを聞いたことがあるような氣もした。しかし、それも定かな記憶ではないし、平生父が戦時中、ことに戦地における自分の体験を話してきかせるようなこともほとんどなかった。ただ、泥酔した折などに、それつのまわらなくなった口ぶりで、ごく断片的な追想をなかば自分自身に向かって語りかけるような調子で眩いたりすることはあった。たとえば、終戦まぎわの退却のさいちゅう、父の親友が軍靴の底にたまった雨水を皆の忠告も無視してガブ飲みし、その翌日高熱に冒されたあげく狂死したという話を信吾は聞いたことがある。それは、父のおくられたインドシナのジャングルでの出来事であつたらしい。その強行軍の前には百七十名もいた部隊員のうち、最後まで生き残つた者はたつたの十名だったというから、よほどの悪戦苦闘をしいられたのであらう。

それからまた、信吾がまだ小学校にあがつてまもないころ、そう、ちょうど隣国の朝鮮に戦争が勃発したじぶんのことだ。その新たな戦火のニュースに刺戟されたのか、したたかに酔いしれた父が彼や姉のいる前で醜態をさらけだし、何かに憑かれたように暴れ狂いながら、わけの判らないことを口走っていた、そんな記憶が彼にはある。それがあくまでも「わけの判らないこと」でありながらも、人一倍早熟な子供であつた彼は幼な心に、戦争というものの恐ろしさをばくぜんと感じ、へもし父が戦死していたならば、自分は生まれてはこなかったのだ……という奇異な思いを味わわされたのであつた。ふだんは一男一女の良き父親であり、たより甲斐のある夫で

あり、安定した中堅商社に勤めるサラリーマン——そんな父のあまりに突然のあまりに乱れたふるまい、その原因が《戦争》というものであるという事実だけは、七つになったばかりの彼にも感じられたのである。

いま、ベトナムという、かつて他でもない自分の父親が赴き戦った、同じ場所で行なわれている《他国の戦争》に関する松本民治の発言をうつろに受けとめながら、日下部信吾はそのときのことを思いだし、幼い自分の胸にめばえた恐怖とも愕きともつかないふしぎな感情が甦りはじめるのを覚えていた。そしてそれは、今朝方聞いた父の寝ごとに対する彼のこだわりを拍車をかけた。彼は今また例の「逃げるぞ……撃つな……素っ裸で……おい、よせッ……看護婦が……」という言葉の裏側に展<sup>ひら</sup>がる光景を想像しはじめたのである。――

まさきに彼の頭にうかんだのは、何者かが銃をかまえて立っている姿であった。つづいて自分の父親がそれを懸命に喰い止めようとしている様子がうかび、その向こうにどこかにむかって逃げ駆け行って行こうとしている人間の後姿を思い描いた。全裸だ……男か、それとも女か……そこで、いったん定まりかけた図がスーッとかき消え、ふいに素っ裸の女の影がうかびあがった。それはしだいにはっきりとした輪郭をとりはじめ、やがて一人の若い看護婦が白衣を剥ぎとられて、何者かに犯されかけ、あわてふためいて逃げようとしている光景に変わった。

その二つの図がどうにも結びつかないままかわるがわるに顯れ、ついには二種類の写真のネ

ガ・フィルムを重ねあわせたような格好で彼の脳裡に灼きついてしまったとき、彼はそこにむごたらしさよりもむしろこの上なく猥褻なものを感じた。滑稽な漫画的な感じさえしてくるのだ。

日下部信吾は、そんな自分を恥じた。そして激しい焦りを覚えた。へけつきよく判らない、何も判っちゃアいないんだ……彼は大きく首を横に振って、すべての想念を断ち切り、つまらないこだわりなど捨ててしまおうと努めた。だが、そうすればするほど、父の不可解な寝ごとやうつけきった表情はいっそう彼の頭にまとわりつき、凶まがしい癌腫のように重く執拗に滞りはじめるのだった。

「日下部、きみはどう思うんだ」とつぜん松本民治が訊ねかけてきた。

「どうって……何がさ？」

一同が笑った。疲れた、苦い笑いだった。が、松本民治は笑わず、こころもち眉を蹙め、頬骨をひきつらせて、

「なんだ、聞いていなかったのか……今日は重要な会合なんだからな、しっかりしてくれよ。闘いはこれからなんだぜ」

ふたたび笑いとどよめきとが起こった。今度は、明らかに嘲弄の笑いと思われるものもふくまれていた。体育会系学生との衝突による傷害事件の捜索を口実に学内に機動隊が導入され、その

とき泊まりこんでいた数人の学生が逮捕されて以来、米軍資金導入問題を発火点として全学的に燃えあがったK大闘争もやま場を越し、ことに平常どおり授業が再開されるようになってからというものの、急速に衰えていった。もともとそれほど戦闘的なグループではなかっただけに、彼らのサークルにもある種の倦怠感ばかりが満ちあふれ、ひとところのような活気は完全に失せてしまっていた。

「……これから？」と、よこあいから口をはさんだのは、今日集まった他のメンバーより一年下級生の浅井健一だった。「松本さんは、これからどうしようという考えなんですか？」

「そんなこと、判りきってるじゃないか……街頭闘争さ。学内の各セクトとは今までどおり共闘し、他の大学の連中とも一緒にやれる部分はやってゆく……そうして、来たる十・二一を新たな突破口として再出発し、徹底的に闘いぬくのさ」

「……本気ですか？」

松本民治はしかつめた表情をよそおったまま、ゆっくりと顎をひいて、答えた。

「当然」

「でも、じっさいんとこ、俺たちいったいどこまでやれるのかなァ」と、松本民治の隣に坐っていた佐川良介がため息まじりの声をだして言った。「学内改革の問題をもっと広く敷衍<sup>ふえん</sup>して街頭闘争にまで展開させてゆくという考えは、判らないではないけど、ちょっと危険な気もするんだ、

俺にはな。個人的にも、何だか不安だし……」

「危険だとか、不安だとか……そんなことは最初から覚悟のうえさ。ただ、ぼくはね、しっかりした情況分析をして、そのうえで、いちばん効果的な方法で闘いぬくべきだと、そう思うんだよ」と、松本民治の参謀格である岸太一が言った。彼は一同のなかではもっとも政略、戦略的な方面にたけた学生だった。「今までみたいなやり方じゃ、けっきょく尻つぼみになっていつちまう……」

「だからさ、どこにもっとも重点がおかれているか、ということなんじゃないかな……それも個々人のね」と、ようやく一同の話のなかに溶けこむだけの気力を取り戻した日下部信吾が言った。「今度の学内における闘争への係り方が、ぼくらのサークルの場合他の様ざまなセクトとはかなり異なっているし、それもサークルのメンバーの一人一人がそれぞれ自由なかたちで、あくまで個人的に係ってきたのだから……そう、いうなれば、皆が皆ノン・セクトなんだからね。だから、今後さらに学外での政治闘争にも参加していくとしても、その前にまずその辺のところ、きちんと整理してみなくてはならないんじゃないか」

「そうなんだよな……要するに、各々の立場をここいらでもう一度はっきりさせておこうということだ」と、佐川良介があいづちを打った。

「そう……今度の問題のそもそもの発火点となった米軍資金導入の一件、それ自体が二重性をお

びているということを何より先に再確認しておこうじゃないか。つまりだね、一つは確かに政治的側面と言っても良い……現在インドシナで卑劣な侵略行為を行なっている米軍の金がぼくらの大学にも流れこんできているという事実は、その構成員であるぼくらもまたベトナム侵略戦争に加担していること、ベトナム人民に対して加害者の位置にあることを立証しちまつて……その点の料明をさらにおしすすめていくと、必然的にもっと広範な学外闘争を展開すべきだということになるだろう」そこまで言って、日下部信吾はひと息吐き、なにげなく天井を見あげた。どこかの国の地図のようなしみがクリーム色の漆喰を茶褐色に染めていた。「……一方、その問題はまた、ぼくらの学んでいる学問の質ということにも係っていると思うんだ。いったい何を、どう学ぶべきなのか……いや、それ以前に何故学問をするのか、考えてみる必要がある。そうでなければ、大学にいることが無意味じゃないか。今度の一件は、はからずも産学協同の欺瞞性をさらけだしてくれたわけだからね。ぼくら皆なんとか無事大学を卒業したところで、けっきょくは新産業体制のなかに組みこまれてゆく人形みたいな存在にすぎないのではないか……そのことを示してくれたんだ。いまや大学は有能なロボットを大量に製造し、世の中におくりだす機械工場と化しちまつてゐるのさ。そうして、ぼくらは日常性のただなかに、なんら創造的な期待に胸ふくらませることなく、埋没してゆかされようとしているんだ……」

「不安なんだよなッ、早い話が」今まで黙りこんでいた崎山遼策がだしぬけに叫んだ。一同の視



線がいつせいに彼の顔に注がれた。彼の父親は、神戸では一、二を競うほどの名高い実業家だった。その末の息子であり、南青山にある高級アパートの一室を借りて住み、平生は他のメンバーには及びもつかない贅沢な暮らしをしながら、ときとして人一倍過激な言動をとる、そんな彼に対する皆の反応は複雑だった。このときも、彼を見つめている一同の愕きの表情のなかには、羨望と侮蔑との入りくんだ一種異様な感情がみなぎっていた。日下部信吾は自分の胸中にもそうした気持ちがあわだかまっているのを否みがたく感じたが、あえて押し殺し、むしろ崎山遼策の突飛な発言をそのまま受けとめ、かばうような調子で話をつづけた。

「そう……不安なのさ。ぼくらは学んだ、日本経済の飛躍的發展について、そのためにあがなわれてきた幾多の犠牲について、日本の近代化における二重構造について……だけど、ぼくらはそれらの課題を学び、論じあいながらも、けっきょくはなんら解決のすべなくみずから発見した落とし穴のなかに、その存在に気づいているくせに、おちこんでゆくこうとしている……バカな話さ」

日下部信吾の言葉がようやく跡切れたのに機を得て、崎山遼策は、

「不安なんだよなッ」と、今一度くりかえした。「自分みずから選べるはずの未来……それが実はとてつもなく不安なのさ。選べるんだ、俺たち皆自由なんだからな、自由に選べる……でも、俺たちはやっぱり、最初から判りきっている落とし穴のなかにとびこんでゆくことを選んじまうのさ。薄汚い現実って奴をなッ」